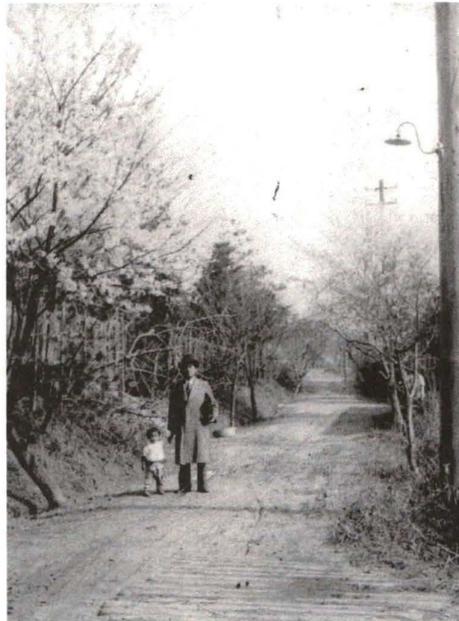


永楽園に住みて

二十三回生 金尾(尾崎) 景子

永楽園のゲートを入った先で父と

桜並木の桜がまだ小さい頃です(昭和16年4月撮影)



物心がついた頃には、家の前に大きな池がありました。すり鉢形でしたが、一カ所だけ安全に水際へ下りられる砂場があり、よく目だかが群がっていました。あの頃は、まだ蛍が飛びかい、捕まえて蚊帳の中へ放

子供の頃の好きな遊び場は、畑を横切って、小高い丘を越え石段を下りたところにある旧精華女学校(平屋造りでいつも清潔に整備されていた)に行き着き、その庭を通って草道を更におりていくと千里山の東の端、佐井寺の西の端の境界辺りに出ます。そこには緑色の水を満々と湛えた神秘的な池があり、その池の樋のところはいつもポタポタと水が落ち、窪みが出来ていて、小さな田螺などがいました。いつも得も言われない心地よい香がありました。そこから畦道を通って小川に辿り着くと、網などでめだかや小さな海老、小鮒などを捕ってよく遊びました。

春はレンゲ畑や土筆とり、夏は蝉取り、秋は団栗を拾ったり、山の柿をこっそり頂いて食べたこともありました。

家の横の道を北へ真っ直ぐに行き、突き当たると吹田一中の裏門に行き、途中右に折れて又北へ向かうとお稲荷さんがあります。初午にはお菓子をもったりした楽しい出があります。そこから奥へは道がありましたが鬱蒼とした雑木林になっていて怖くて行けませんでしたが、時には関西大学の乗馬クラブの人が数人馬に乗って雑木林の奥へ消えていったり、又時には猟師さんが鉄砲を持って雉を腰にぶら下げて出て来たのに出会したりと、子供心に好奇心で眺めていた

したこともありました。夏には菱が茂り父が罎に乗って菱の実を取り、茹でて食べたこともありました。ほっこりして、ほのかに甘かったのを覚えております。

永楽園入口のゲートをバックに親戚のお兄ちゃんと一緒

「永楽園」の名前がはっきりと見えます



ことを思い出します。季節により郭公が聞えてきたり、夜には梟のほうほうと鳴く声が響いたりしました。

千里山の文化の香り高いところと、手付かずの自然が残された環境の中でのびのび過ごせたことは、永楽園が「千里山の果て」に位置していたことが大きな要因かと思われれます。

懐かしい千里山駅や下の噴水周辺、変わってしまったであろう里山など、思い出せば心の中に映像として蘇る故郷や友人、知人があることは有難く幸せなことであり、又私の生涯の心の宝物でもあります。

完